

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01177

研究課題名（和文）フッサール「『改造』論文」とその文脈に関する総合的研究：社会の現象学を中心に

研究課題名（英文）Husserl's Kaizo Articles and their Contexts

研究代表者

植村 玄輝（Uemura, Genki）

岡山大学・社会文化科学学域・准教授

研究者番号：40727864

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フッサールが1923/24年に日本の総合雑誌『改造』に発表した連続論文、通称「『改造』論文」について、以下の二点を明らかにした。（1）本研究は、同論文における個人倫理学をフッサール倫理学の発展のなかにより適切に位置づけ、それがその前後の時期の倫理学の要素を不整合なく併せ持つことを示した。（2）今述べた成果を踏まえ、また1920年代のフッサールの共同体論を併せて精査することによって、本研究は、「『改造』論文」では素描されたにとどまった社会倫理学の構想を、形式的な観点からの政治哲学として再構成した。これらの成果は2023年5月・9月に本研究の一環として開催された国際学会でも発信された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「『改造』論文」はこれまで、フッサールが生前に刊行した著作のひとつであるにもかかわらず、その内容および出版形式の独特さから、周縁的なテキストとして扱われる傾向にあった。それに対して本研究は、「『改造』論文」における個人倫理学および社会倫理学の構想をフッサール現象学全体のなか位置づけることで、同論文の重要性をより明らかにした。また本研究は、フッサールが「『改造』論文」を日本の雑誌に発表したという出来事が当時の文脈において何を意味したのかを、当時の日本哲学の状況などを踏まえながら解明した。これらによって、フッサール現象学をより広いパースペクティブで捉える研究を用意する点で意義深いといえる。

研究成果の概要（英文）：The present project on a series of articles published by Husserl in the Japanese journal Kaizo in 1923/24, known as the Kaizo articles, has achieved the following two results. First, the present project places the individual ethics discussed in the articles more appropriately in the development of Husserl's ethics and shows that it combines elements of his ethics from earlier and later periods without inconsistency. Second, based on the results just described and through a close examination of Husserl's theory of the community in the 1920s, the present project reconstructs Husserl's idea of social ethics, which is only sketched out in the Kaizo Articles as a political philosophy from a formal axiological point of view. The results were communicated at an international conference in May and September 2023.

研究分野：哲学

キーワード：フッサール 現象学 社会哲学 共同体 倫理学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の申請時における背景には、初期現象学(ミュンヘン・ゲッティンゲン学派)における社会哲学の再評価という近年の研究動向があった。そして本研究課題の申請時における動機は、いま述べた研究動向を踏まえたとうえで、1920年代以降のフッサールにおける社会哲学の構想をあらためて明らかにし評価し直すことにあった。そのための手がかりとなる問いを、本研究課題は申請時に以下のようなかたちで掲げた。

社会のなかの個人としての私たちが持つ経験(「社会的経験」)を現象学的に分析することで、フッサールは社会とそのなかの自己のあり方に関してどのような主張を引き出したのか、それらの主張はどれくらいもっともなのか。

また、この問いに取り組むために必要とされる一般的な手続きとして、本研究課題は申請時に、以下の作業が必要であることを見積もった。

- (a) フッサールによる社会的経験の現象学的分析の再構成
- (b) フッサールの社会哲学的な主張の再構成
- (c) それらの主張の哲学的な評価

これらの問いと手続きとを導きとして、本研究は、「『改造』論文」と通称されるフッサールの連続論文に着目し、同論文を主要な典拠としてフッサールの社会哲学の構想を再構成し再評価するという計画を立てた。こうした選択の最大の理由は、「『改造』論文」が、1923年から1924年にかけて日本の総合誌『改造』に掲載されたテキストであり、フッサールが生前に自分の責任で発表した公刊著作であるからというものである。

2. 研究の目的

本研究課題の申請時において、上記の問いに上記の手続きのもとでそれぞれ異なる角度から取り組む三つのサブプロジェクトが立てられた。それらのサブプロジェクトが取り組む問題は、以下のように定式化できる。

- (I) 「『改造』論文」は、フッサールの思想の発展という文脈にどのように位置づけられるのか。
- (II) 「『改造』論文」は、フッサールの同時代の文脈にどのように位置づけられるのか。
- (III) 「『改造』論文」は、より広く捉えられた社会哲学の歴史という文脈にどう位置づけられるのか。

これらのサブプロジェクトはどれも、「『改造』論文」における三つの主題、つまり、個人倫理学、現象学の方法論(本質研究としての現象学)、社会倫理学を再構成し評価するためのものである。(I)を通じて明らかになることが期待されるのは、「『改造』論文」における三つの主題をめぐる議論に、1910年代の関連する議論(とりわけ、この時期に三度繰り返された倫理学講義や1919年の『自然と精神』講義における共同体論)がどのように流れ込んでいるのか。(II)を通じて明らかになることが期待されるのは、「『改造』論文」における議論が持つ、初期の現象学者たちの社会哲学との関連性である。フッサールと接続されるはずの議論として申請時に見込まれていたのは、ライナッハの社会的作用論、そしてシュタイン、ヴァルター、尾高朝雄の共同体論・国家論である。(III)を通じて明らかになることが期待されるのは、フッサールの社会哲学が、ヘーゲルおよびテイラーそれぞれの社会哲学との関連でどのように評価されるかということである。

3. 研究の方法

本研究課題は、文献研究を主な方法として遂行された。具体的には、主要文献であるフッサールの「『改造』論文」およびそれと関連づけられたテキストの翻訳および注解するという作業を行った。こうした作業は、研究代表者および分担者の各自が個人として取り組んだものに加え、原則としてメンバー全員が参加する研究会というかたちで行われたものも含まれる。さらに、フッサールの遺稿を管理するルーヴァンのフッサール文庫と連携し、翻訳・注解するテキストの校訂に関する問題についても解決を図った。また、こうした翻訳・注解作業によって新たに明らかになった知見を踏まえながら、上記項目で挙げたフッサール以外の著者によるテキストについても、各自がそれぞれの担当する範囲で読解を行った。

4. 研究成果

本研究は、申請時の見込みよりも多くの時間をフッサールの「『改造』論文」の翻訳および注解という作業に費やすことになった。こうした結果を招来した事情としてまず挙げられるべきは、「『改造』論文」の翻訳を、一般読者も念頭においたかたちで出版できることが、本研究課題に

取り組みはじめた後に決まったという事情である。これによって、訳文を(ドイツ語原典との併読することも前提とした)研究者向けのものではなく、なるべく平易なものに仕上げる必要が生じたため、作業が当初の見込みを超えて長引くこととなった。これによって本研究課題には、申請時の課題に当初の見込みからすると深く踏み込めなかったという結果がたしかにもたらされた。しかしながら、20世紀の古典的哲学者ともいえるフッサールの著作を、最新の研究も踏まえて翻訳し公にできることそれ自体は、人文学の研究にとって最大の成果でもある。残念ながら本研究課題のうちに翻訳を完全に終わらせることはできなかったが、作業はすでに最終段階にある。完成版の成果は講談社学術文庫より近日中に出版される見込みである。

本研究課題の成果として次に挙げることができるのは、フッサールの「『改造』論文」の公刊100周年を記念した国際学会の開催である。同学会は、ルーヴァン大学(KU Leuven)のフッサール文庫を共催者として、2023年5月に岡山大学で第一弾が、2023年9月にルーヴァン大学で第二弾が開催され、10カ国から延べ26名の講演者が参加した。また、同学会をもとにした英語論集(Genki Uemura, Emanuele Caminada, and Julia Jansen [ed.], *Essays on Husserl's Kaizo Articles. Historical Context, Systematic Questions, Global Perspectives*, Karl Alber, forthcoming)の出版も決定しており、現在そのための作業を行っている。

上記の(I)から(III)の課題については、それぞれ以下のような成果を挙げることができた。

(I-1) 植村は、「『改造』論文」におけるフッサールの個人倫理学の構想について、それが同論文に前後する時期の倫理学のアイディア両方を含みながらも整合的であることを明らかにした。

(I-2) また植村は、「『改造』論文」で強調された「本質研究としての現象学」という方法論上の立場について、同様の発想が1910年代に構想した「アプリアリな構築的目的論」の背景にあることを明らかにした。

(I-3) さらに植村は、「『改造』論文」第三論文においてフッサールが展開した「倫理的生の発生的倫理学」の概要を、同時期の講義や草稿も利用しながら明らかにした。

(I-4) 鈴木は、「『改造』論文」における社会倫理学の基礎をなすフッサールの共同体論について、1920年代の草稿における議論を踏まえた再構成を与えた。八重樫は、「『改造』論文」の社会倫理学について、それが形式的な倫理学としておよそ完成しているということを明らかにした。

(I-5) 吉川は、「『改造』論文」の個人倫理学と社会倫理学における最重要概念「革新(Erneuerung)」について、それが三つの様態に区分できることを、同論文の議論に則して解明した。

(II-1) 植村は、フッサールの共同体論と多くの類似点を持ながらもいくつかの点でそれと対立するヴァルターの共同体論について、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派(とりわけミュンヘン学派)における現象学の展開を踏まえた再構成をあたえ、それがゲールヴィッチによる疑念から免れていることを明らかにした。

(II-2) 鈴木は、フッサールが1920年代に展開した「社会的作用(sozialer Akt)」に関する議論について、それがライナッハによる1910年代の社会的作用論をどのように継承し発展させているのかを明らかにした。

(II-3) 竹島は、フッサール現象学を基礎とした社会団体論・国家論を標榜した尾高朝雄について、そのヘーゲル読者としての側面を明らかにした。

(III-1) 植村は、1920年代にフッサールのもとで学んだ田辺元の「種の論理」について、それがフッサールの共同体論と潜在的な競合関係にあることを、当時田辺が参照しえたフッサールの文献を用いながら明らかにした。

(III-2) 竹島は、ドイツ哲学における社会哲学の専門家として、フッサールが1917年に行った講演「フィヒテの人間性の理想」におけるフィヒテ解釈の検討を行った。

(III-3) 吉川は、フッサールの倫理学がマードックの倫理学と共通して持つ特徴を明らかにした。

(III-4) 八重樫は、共同体と法に関するフッサールの見解がケルゼンの法哲学とどのように関連するかを明らかにした。

以上の成果の一部は、本研究課題の推敲中にすでに刊行されており、その他のものについても、上述の翻訳書や英語論集のほかで、あるいはそれ以外の媒体において発信される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Uemura Genki	4. 巻 35
2. 論文標題 Community and the Absence of Hostility: Interpretation and Defense of Gerda Walther 's Account	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Phainomenon	6. 最初と最後の頁 25 ~ 46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2478/phainomenon-2023-0003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植村玄輝	4. 巻 35
2. 論文標題 見渡し・無価値化・自己統制：フッサール「『改造』論文」における倫理的な生の発生的現象学	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 立命館哲学	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 崇志	4. 巻 53
2. 論文標題 価値と他者はどのように経験されるか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 倫理学研究	6. 最初と最後の頁 4 ~ 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24593/rinrigakukenkyu.53.0_4	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植村玄輝	4. 巻 32
2. 論文標題 歴史主義批判から形而上学へ：フッサールとデイルタイを分け隔てるもの	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 デイルタイ研究	6. 最初と最後の頁 29-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植村玄輝	4. 巻 22
2. 論文標題 コンラート＝マルティウスの現象学的实在論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 プロセス思想	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32242/processthought.22.0_49	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八重樫徹	4. 巻 38
2. 論文標題 人生はなぜ生きるに値するのか：フッサールによる生の否定と肯定	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川孝	4. 巻 7/1
2. 論文標題 マードックと現象学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フィルカル	6. 最初と最後の頁 184-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木崇志	4. 巻 132
2. 論文標題 フッサールにおける共同精神と歴史的世界	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 133-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00017995	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹島あゆみ	4. 巻 75
2. 論文標題 体系期ヘーゲルにおける承認 『法の哲学要綱』(1821)を中心に・2	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岡山大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/okadai-bun-kiyou/64220	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹島あゆみ	4. 巻 55
2. 論文標題 『法の哲学要綱』第一部「抽象法」における所有の問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/65124	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川孝	4. 巻 70
2. 論文標題 倫理学における芸術作品の使用と想像力の問題：フッサール、マードック、その後継者たち	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理学年報	6. 最初と最後の頁 18-28
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川孝	4. 巻 19
2. 論文標題 生き方としての観念論 見ること学ぶために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フッサール研究	6. 最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木崇志	4. 巻 49(13)
2. 論文標題 現れる他者との向き合い方：現象学の立場から」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 226-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木崇志	4. 巻 46(16)
2. 論文標題 自分に向けて話すこと、他者に向けて話すこと：ウィトゲンシュタインとフッサール」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 223-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植村玄輝	4. 巻 74
2. 論文標題 体系期ヘーゲルにおける承認 『法の哲学要綱』(1821)を中心に・1	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岡山大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/okadai-bun-kiyou/63062	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Genki Uemura	4. 巻 15 (3)
2. 論文標題 Articulating Consciousness: Brentano and Husserl on Descriptive Analysis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Front. Philos. China	6. 最初と最後の頁 352-379
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3868/s030-009-020-0021-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植村玄輝	4. 巻 48
2. 論文標題 現象学的観念論と汎心論：フッサールの逡巡	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 173-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植村玄輝	4. 巻 18
2. 論文標題 誕生と死、形而上学と神学：『現象学の限界諸問題』第I部および第III部を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フッサール研究	6. 最初と最後の頁 45-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川孝	4. 巻 18
2. 論文標題 人生の意味を希求するフッサールの実存の記述：第42巻『現象学の限界問題』を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フッサール研究	6. 最初と最後の頁 95-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八重樫徹	4. 巻 18
2. 論文標題 道徳的ペシミズムと愛の価値：『現象学の限界問題』第IV部前半を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フッサール研究	6. 最初と最後の頁 76-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ayumi Takeshima	4. 巻 49
2. 論文標題 The Reception and Translation of Hegel in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Verifiche	6. 最初と最後の頁 147-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹島あゆみ	4. 巻 73
2. 論文標題 承認論の現在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計31件 (うち招待講演 16件 / うち国際学会 11件)

1. 発表者名 Genki Uemura, Toru Yaegashi
2. 発表標題 Husserl's Kaizo Articles in Japan. A Failed Attempt?
3. 学会等名 Husserl's Ethics and Social Philosophy in Context. The Kaizo Articles Centenary Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Genki Uemura
2. 発表標題 What is Wrong with Husserl's A Priori Ethics?
3. 学会等名 Husserl's Ethics in the Global Context. The Kaizo Articles Centenary Conference II (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Genki Uemura
2. 発表標題 Constructing an Ideal. Husserl on the Best of All the Possible Worlds
3. 学会等名 Phenomenology Imagination, Intuition and Modality (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Genki Uemura
2. 発表標題 From Neo-Kantianism to Phenomenology: Yamauchi Tokuryu's Reception of Husserl
3. 学会等名 La phenologie et "l'oubli" du Japon (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Genki Uemura
2. 発表標題 Edith Stein on Motivation and Its Limits
3. 学会等名 Motivation and Time (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 対象として構成された生の全体：フッサール「『改造』論文」における倫理学と現象学
3. 学会等名 立命館大学哲学会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 植村玄輝、鈴木崇志、八重樫徹、吉川孝
2. 発表標題 革新・共同体・真の人間
3. 学会等名 フッサール研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Takashi Suzuki
2. 発表標題 Externalized and Historicized Community: A theory of Culture in the Kaizo articles
3. 学会等名 Husserl's Ethics in the Global Context. The Kaizo Articles Centenary Conference II (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木崇志
2. 発表標題 フッサール『改造』論文における「人間」概念：日本哲学との比較研究
3. 学会等名 広州中山大学哲学系講座（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Takashi Yoshikawa
2. 発表標題 The Ethics of Knowing in Husserl: To Describe the Moral Experience of Scientists Involved in Minamata
3. 学会等名 Husserl's Ethics and Social Philosophy in Context. The Kaizo Articles Centenary Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Toru Yaegashi
2. 発表標題 Overcoming Pessimism with Husserl?
3. 学会等名 Husserl's Ethics in the Global Context. The Kaizo Articles Centenary Conference II (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Genki Uemura
2. 発表標題 The Early Husserl on Metaphysics and Epistemology
3. 学会等名 Alternative Approaches to Phenomenology and Metaphysics (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 アプリアリな構築的目的論と形而上学の究極の問い
3. 学会等名 連続セミナー「フッサールの倫理学と社会哲学」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 フッサールの社会存在論：田辺の（潜在的な）競合相手としての
3. 学会等名 田辺元没後六十周年記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 フッサールと可能世界
3. 学会等名 松田毅『虹と夢の存在論』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 ヘートヴィヒ・コンラート＝マルティウスの現象学的實在論
3. 学会等名 日本ホワイトヘッド協会シンポジウム「實在論をディグる：20世紀初頭の英米および大陸哲学を中心に」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 Husserl's conception of community as a subject of knowledge
3. 学会等名 Husserl on Community (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 ゲルダ・ヴァルターの共同体論と社会倫理学の構想
3. 学会等名 セミナー「現象学派の社会哲学」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉川孝
2. 発表標題 フッサールとマードックにおける見ることの倫理学 認識的不正義に先立って
3. 学会等名 連続セミナー「フッサールの倫理学と社会哲学」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 八重櫻徹
2. 発表標題 人生は(なぜ)生きるに値するのか: フッサールによる生の否定と肯定
3. 学会等名 日本現象学会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 八重櫻徹
2. 発表標題 フッサールとケルゼン: 法とはどのような規範なのか
3. 学会等名 連続セミナー「フッサールの倫理学と社会哲学」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ayumi Takeshima
2. 発表標題 The Concept of Freedom in the Introduction to the Elements of the Philosophy of Right
3. 学会等名 XXXIII. International Hegel Congress (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ayumi Takeshima
2. 発表標題 The Recognition Against the Current Crisis: Ethical Life in the Philosophy of Right
3. 学会等名 Confronting Crisis: III. Australian Hegel Society Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹島あゆみ
2. 発表標題 ヘーゲルの読み手としての尾高朝雄
3. 学会等名 セミナー「現象学派の社会哲学」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木崇志
2. 発表標題 フッサールの社会的作用論
3. 学会等名 連続セミナー「フッサールの倫理学と社会哲学」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木崇志
2. 発表標題 フッサールにおける共同精神と歴史的世界
3. 学会等名 第2回東アジア間文化現象学会議
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木崇志
2. 発表標題 近づくことと離れること：フッサールの「共生」概念を手がかりとして
3. 学会等名 瀬戸内哲学研究会ワークショップ「共感と理解」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 現象学者としての尾高朝雄
3. 学会等名 東アジアにおける哲学の生成と発展：間文化の視点から（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植村玄輝
2. 発表標題 アприオリな構築的目的論：フッサールの歴史主義批判の背後にあったもの
3. 学会等名 2020年度日本デイルタイ協会大会「デイルタイ、フッサール、ハイデガー」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉川孝
2. 発表標題 倫理学における芸術作品の使用と想像力の問題：フッサール、マードック、その後継者たち
3. 学会等名 日本倫理学会第71回大会：共通課題「想像力と倫理」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉川孝
2. 発表標題 禁じられたポルノ映画と実存――現代の實在論と現象学との対話のために
3. 学会等名 フッサール研究会シンポジウム「フッサールと現代の實在論」
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 廖欽彬、河合 一樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 474
3. 書名 危機の時代と田辺哲学：田辺元没後60周年記念論集	

1. 著者名 Burt C. Hopkins, John J. Drummond	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 316
3. 書名 The New Yearbook for Phenomenology and Phenomenological Philosophy Volume 19, Reinach and Contemporary Philosophy	

1. 著者名 Ingrid Vendrell Ferran	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 245
3. 書名 Else Voigtlander: Self, Emotion, and Sociality	

1. 著者名 Francois-Xavier de Vaujany, Jeremy Aroles, and Mar Perzts	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 784
3. 書名 The Oxford Handbook of Phenomenologies and Organization Studies	

1. 著者名 吉川孝、荒畑靖宏	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 あらわれを哲学する：存在から政治まで	

1. 著者名 Rodney K. B. Parker	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 311
3. 書名 The Idealism-Realism Debate Among Edmund Husserl ' s Early Followers and Critics	

1. 著者名 Cynthia D. Coe	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 411
3. 書名 The Palgrave Handbook of German Idealism and Phenomenology	

1. 著者名 Evangelia Sembou	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 241
3. 書名 Hegel's Political Philosophy: Themes and Interpretations	

1. 著者名 Christopher Erhard, Tobias Keiling	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 436
3. 書名 The Routledge Handbook of Phenomenology of Agency	

1. 著者名 Thomas Szanto, Hilge Landweer	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 620
3. 書名 The Routledge Handbook of Phenomenology of Emotion	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉川 孝 (Yoshikawa Takashi) (20453219)	甲南大学・文学部・教授 (34506)	
研究分担者	八重樫 徹 (Yaegashi Toru) (20748884)	広島工業大学・工学部・准教授 (35403)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 崇志 (Suzuki Takashi) (30847819)	立命館大学・文学部・准教授 (34315)	
研究分担者	竹島 あゆみ (Takeshima Ayumi) (70273951)	岡山大学・社会文化科学学域・教授 (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Husserl's Ethics and Social Philosophy in Context. The Kaizo Articles Centenary Conference	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Husserl's Ethics in the Global Context. The Kaizo Articles Centenary Conference II	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ベルギー	KU Leuven		